

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.115

---



---

2016.07.24

詩と評論

---

月刊「MéLange」

Vol.115 2016.07.24

「月刊めらんじゅ」編集部

### 詩 & 俳句

照準 …………… 福田知子 03

海外詠② (俳句) …………… 岩脇リーベル豊美 04

帰路 …………… にしもとめぐみ 04

ゴム／ビニール傘 …………… 中嶋康雄 05

野球中継は流れる …………… 黒田ナオ 06

おまえは犬かい? …………… 中堂けいこ 07

みきり／されど …………… 大橋愛由等 12

無題 (わ、あるく隣人) …………… 高谷和幸 13

幻覚に基づく星読みの独り言 …………… 野口 裕 13

子守唄 …………… 富 哲世 14

桃を食む(朝風十五句／良信忌十句) (俳句) …………… 高橋雅城 14

サンゴ礁の波 …………… 北岡武司 15

### 「Mélange」読書会資料

「詩人のための(?)カント入門②」 発表資料…………… 北岡武司 8

### 連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈16〉 田村隆一 の作品から…………… 富 哲世 10

神戸詞あしび 104 「突如あらわれた神話時代の神は」…………… 大橋愛由等 16

編集部だより★35／第115回「Mélange」例会の第一部読書会は、哲学者で詩人の北岡武司に、2月につづいて講師をお願いして、「詩人のための(?)カント入門②」を語っていただく。北岡氏の語りの魅力は、ひとつカントについて語るのにも、周辺の知識や情報をふんだんに縦横にかつ自在にしめてくれることである。聴く側の刺激をかぎりなく与えてくれるのが魅力である。岡山大学を退官されて、まさに制度的なしほりから解き放たれ、哲学者としてこれからますます思惟を深めていく立場におられるのも嬉しい。これからも「Mélange」例会で、木澤豊氏の「宮沢賢治がたり」、山田兼士氏の「現代詩がたり」とともに、常連の語り手として、お招きしていきたい。(大橋記)

## ◆ 照準

### 福田知子

めげそうなるさ おもいからだ  
朝いちばんのココロざしはテレビ体操  
気持ちの照準を合わせる  
「テレビでスペイン語」ん？ 不思議な男女の  
名詞たち

「テレビ体操」今日は多胡さん よかった！  
コメントを片耳で聞きながら手足、肩、腰の眠  
気を覚ましていく  
「サラとダクン」でほっこり北欧童話に旅し  
て  
「にほんごであそぼ」でみわサンのことばにあ  
たたまる  
それからニュースを見て 次なる楽しみは  
「と姉ちゃん」  
花森安治モデルの花山伊佐治  
「心はついにものに具現化される」  
彼と淀川長治は神戸の長田高校出身でなじみ  
の名前  
企画外れの二人に昔からひそかに憧れていた  
まだ知性が生きていた時代のことだ  
反知性主義 ポピュリズムが横行している  
いま  
国民を騙すことなど簡単だとタカをくくって  
NHKも新聞も当局の御用メディアになって  
と姉ちゃん 爆弾は怖い焼夷弾は恐る  
るに足らずって

政府に騙されて多く人々が焼け死んでいった  
花山伊佐治の涙ながらの怒りはこの国ではも  
う昭和という過去の時代劇でしかない  
知性の照準を社会に合わせることさえ 考え  
ることさえ面倒になって  
ガラガラボンされればいい……なんて短絡的  
なポピュリズム  
いろいろな思いがやってくる  
気分を変えてコーヒータイム  
内田樹 姜尚中『世界「最終」戦争論』―近代  
の終焉を超えて  
これは最近最も面白かった本  
柄谷行人『憲法の無意識』  
橋本治『国家を考えてみよう』  
池田清彦『まじめに生きる』と損をする』  
これら三冊を同時にぐるぐる読み巡っている  
朝の時間 就寝前 電車の中……………  
合間に台所に立つ  
腸内フローラにいい酔たまねぎ ニンニク酔  
昆布酔  
酔と材料をつぎ足す  
麦茶をわかす  
掃除機をかける  
布団を干す  
授業準備 添削  
謡曲「土蜘蛛」の謡  
弱い調子で謡うところを何度もテープを聞き  
返す  
それから手紙を書く  
頂いた詩集や詩誌が山積みになっている  
疲れたら「鶴亀」を舞う  
仕舞は難しい  
気晴らしになるほどに上達する日はくるのだ

ろうか  
年齢を重ねるほど自分を 恥を 舞台にのせ  
晒すことは意義深いことだと信じるほかな  
い  
疲れたら違うことをしてみる  
へミングウエイ THE SUN ALSO RISES の  
CHAPTER3を読む  
ここは主人公が娼婦とパリの街角で出会う小  
説の山場  
原書で六頁ばかり  
疲れたら夕食の買い出しに行く  
次なる照準は定まるだろうか  
こんなふうな日々のささやかなことどもとの  
会話や思考や戯れも  
あと一五年もすれば私の「健康年齢」とやらの  
賞味期間が過ぎて  
何することなく緩慢な日々を送るのだろう  
か？  
人は生まれた時から死に向かう  
詩に向かっている今でさえ死に向かっている  
それは生物ならとても自然なことだと『真面  
目に生きる』と損をする』の中で池田さんが  
教えてくれた  
生のどこかで死ぬことはあらかじめ知って生  
まれたはずなのに  
みんな自分は例外だと無意識に思っている  
でも  
「死ぬのは自然なこと」――  
米寿を過ぎた父と母の面差しがふとよぎる  
子ども恋しくてたまらない ため息  
受話器をよぼよぼと伝ってくる 声

## ◆海外詠②

岩脇リーベル豊美

帰心と打ちたく鬼神と出た変換頭脳の盆祭り  
動物園の飼育係にならむと退学せし後輩は熱帯魚  
破門貴族の屍を領地に埋葬する異端のわたし  
ウルトラマン米研究者講話をプロイセン兵舎で聴く  
四十雀が戸箱に巣を作るのにわたし巻戸巻きあげ  
洪水と方舟の価値を死者で計る  
顔見知りの猫とバスを待つこずえ夏至の朝雨  
有刺鉄線を這う蝸牛無事故であれ  
芭蕉否みアウシュヴィッツが見つからない  
残鐘や輪廻ののちの鳩と歩く

## ◆帰路

にしもとめぐみ

青森旅行の途中に  
三沢の寺山修司記念館へ行った  
三沢は広い田園風景  
霧が田園に降りて  
時折トラクターをぬらす  
行けども行けども田園  
寒い夏が過ぎる  
木立に囲まれた奇抜な建物  
不思議な扉をあけると寺山ワールド  
記念館の裏手には紫陽花や木立がしげる遊歩道  
小路のわきには写真に句碑  
寺山が歩いている  
登りつめると大きな句碑が湖を見下ろす位置にある  
〈マツチ擦るつかのまの海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや〉  
ああ、我に帰路はありや  
紫陽花より青く静けさに陽は暮れる  
ああ、我に帰路はありや

※一部寺山修司の歌を引用しています。

## ◆ゴム

中嶋 康雄

在庫が積みあがる  
ある在庫の出荷予定日は  
社長の懲役が終わる頃だろう  
雑草が生えている  
ゴムに根付く新種ということで  
関係者がシールを貼りにきた  
「ゴムの耳はパンの耳」  
というキャッチコピーで売り出したまま  
なにもかもが凍結されている  
新しい総務部長がゴムの耳を  
口から垂らしながら出勤する  
廃液が垂れ流され  
赤ん坊に口がみつがある  
今も口それぞれに家庭教師がついている  
口それぞれが違う言語をしゃべるのを  
楽しみにしている在庫係が  
ソバを食べているが  
ソバはゴムなので消化されない  
尻から垂れ下がるゴムに  
野良犬が群がっている日の翌日は  
少量の雨が降り  
黒光りするゴムとカエルが交尾する

大量のカエルを轆き潰しトラックはやって  
くるが  
空っぽのまま出て行く  
溝に黒い水がたまっている  
黒光りするオタマジャクシが泳いでいる  
古い総務部長の死体が浮かんでいる  
もつと古い総務部長と  
もつともつと古い総務部長と  
もつともつともつとが  
伝票の読み合わせをしている  
輪唱となり  
ゴムがペタペタと  
踊っている

## ◆ビニール傘

中嶋 康雄

よきによき生き生える  
ビニール傘に奪われる  
黒い手帳  
手帳にはつまらない予定ばかり  
膝を抱えていると  
ごみくずになつた気がする

消えてなくなる黒い手帳の  
あんたの予定はごみくずみたいなものだと  
みんなが笑う  
笑う影で  
みんなの黒い手帳も消えている  
うそつばちでもなんでもいい  
予定があれば  
ビニール傘がやぶれない  
雨に服がぬれるのは  
どうしてもいやだから  
必死になって予定を立てる  
立てた予定にふりまわされて  
夜にはずぶぬれになっている  
やつと帰って  
手帳を見れば  
明日の予定はなにもない  
あつたはずの予定が  
いつの間にか消えている  
電話をかけると  
その番号は使われていない  
今朝はその番号から着信があつたのに  
ビニール傘が暗い部屋で  
開いたり閉じたりを繰り返している  
だんだんと開いたり閉じたりが間遠になる  
金属の骨がゆつくりと錆びほどこけてゆく  
引っこ抜かれたキノコのように萎れてゆく  
時計の音だけが聞こえている

## ◆野球中継は流れる

黒田ナオ

帰り道  
夕暮れバスを降りると  
そろそろと八月が忍び寄り  
ビールの底に沈む団地の窓から  
流れてくる野球中継  
甲高いアナウンサーの声は  
はじめては幾つもの泡となる  
電信柱の横に昇る三日月を  
追いかけて  
野良猫たちが集会へと急ぐ頃  
カーン

打撃音が響き  
湧き上がる歓声に  
太鼓や調子つばずれのラッパの音  
打ちました、打ちました  
球はおーきく伸びています  
見上げた陸橋を  
ユニフォーム姿の背中が駆け抜け  
口にふくんだ見えない枝豆の  
ほのかな塩気と  
耳のすぐそばを通り過ぎる  
若い売り子たちの賑やかな声  
バッター交代を告げる場内放送に  
いつか聞いたことのある代打選手の名前が  
夜空にぽっかり浮かんで  
風の中  
溶けて混じって  
消えていく

## ◆おまえは犬かい？

中堂けいこ

ちがうな、これは。トマトではない。白味噌仕立ての夏の定番、厚揚げとトマトの味噌汁の味はいけなかった。天盛りの茗荷が口にあたるだけだった。匂わないのではないか。だから咀嚼のあとの喉を通るときに鼻腔のうちがわをくすぐる、茗荷の草いさがれがまったく感じられない。

ダンカンに似た医者はいった。突発性難聴ではもとの聴覚をとりもどすのは三〇%というデータがあります。神経がやられているので嗅覚障害もまたそれくらいしか回復しないことは覚悟してください。そうか。鼻腔粘膜の神経細胞がくたばったのか。

大きな声ではいえないが、匂いだけで誰かが判別してきた。匂いは良し悪しは別にして自分をとりまく世界の認識の一部だった。十m先を歩くホームレスがわかった。八〇代のお爺さんはミルクの匂いがしたし、お婆さんは楠木の匂いがする。赤ちゃん紙と干し椎茸の匂いがする。隣の猫は虎の匂いがした。石油精製品で作った芳香剤は頭が痛くなる。知り合

いの家に入るのは苦手だった。生活の状態が即座に判別できるのだった。

なんにでも鼻をひくひくさせるので父はいやがった。行儀がわるいじゃないかい、おまえは犬かい？ 小さいころよくいわれた。皿にもられた肉が牛のどの部位か、腿か背か腹か、この油はなんの滲みか、鼻で嗅がなければ一口も食べられないのだった。肉屋の倉庫でぶらさがる、さかさまに吊られる牛の匂いは食卓の上に直結するのだった。

手のひらにいつぱいの錠剤を飲んで一週間、ステロイド剤や毛細血管を拡げる薬なんかや、あれやこれや間違いながらも嗅覚は五〇パーセントはもどつたみたいだ。ダンカンはもう一息ですね、ダンカンはダンカンの匂いがしないのだが。二週間また別の投薬をされる。

家人は匂わないので他人みたいだ。自身も自分の匂いがしないのでわたしが誰かわからない。見知らぬ猿みたいだ。食卓をはさんで、見知らぬ二匹の猿が、美味しい？ うん、うまいよ。どんな味？ うんカレーの味がするよ。カレーね、そうだよ、カレーだよ。猿は匂いのキャッチボールをしながら、自分に返ることがない。やつぱりカレーよね。

# 詩人のための(?)

## カント入門 ②

北岡武司

2016年7月24日

「Mélange」読書会のための資料

カントの批判哲学の根本は現象と〈もの〉/ 自体、感性界と叡智界との区別にある(1)。それゆえ全体としての現実をふたつのアスペクトで見よ、という要請が批判により布告されたのである。そのような区別を、あるいは観点の転回をコギトに要求する契機となるのは、時間空間の主観性の認識である(2)。主観的とは個人的の謂ではなく、理性的存在者一般の特殊たる(人間に特有の)の謂である。理性的存在者という概念で何が思いうかべられているかといえば、これは、これでもう一大テーマとなつてしまふ。また、そのようなテーマに必ず生じる論争の坩堝に投げ入れられてしまふ。ここでは一応、「この世を去つた魂たち」「聖者」「天使」「神」といった存在者を要素とする全体集合というふう理解したい。人間もその一例である。

『純粹理性批判』時間空間論(超越論的感性論) 末尾の「一般的注解 IV」の一文は長くて、迂遠で難しいが、今日はこの一文を読むこととした。

「自然神学で思惟する対象は、私たちにとつて直観の対象ではまったくなく、それ自身にとつても感性的直観の対象ではありえない。自然神学では人は熟慮を施して、この対象のあらゆる直観から(この対象の認識はすべて直観でなければならず、思惟はつねに制限を証明している)ので、思惟であつてはならない。時間と空間という制約を消去していったのである。しかし予め時間と空間とを〈もの〉/ 自体そのものの形式にしておきながら、しかもたとえ〈もの〉(die Dinge)を廃棄しても〈もの〉の現実存在(Existenz)の制約と

して残るような形式にしておきながら、いったいかなる権利でそのようなことができるのか。なぜなら「そのようにしてしまえば」(3) 時間と空間とは一切の現存在一般の制約として、神の現存在(Dasein Gottes)の制約でもなければなるまいからである。時間と空間の両者を万物の客観的形式にしようというのでなければ、私たちの外的ならびに内的な直観様式の主観的形式とする以外に道はない。この直観様式が感性的と呼ばれるわけは、それが根源的 (ursprünglich) ではないからである。すなわちそれによつて直観の客観(Object)が与えらるるような(そして私たちが洞察するかぎりでは原存在者(Umwelt)にのみ属しうるような)直観様式ではなく、この直観様式は客観の現存在に依存しているから、したがつて主観の表象能力が客観により触発されることによつてのみ可能だから、感性的と呼ばれるのである」(B1)以下)。

この一文は多くの示唆を含むが、その内容を簡単に言えば、時間空間は存在者一般の「客観的」形式ではなく、むしろ人間の「主観的」形式であること、神の直観は直観することにより直観の対象が存在にいたらしめるが、感性的直観はそうではないこと、これを主張していることである。冒頭の文章をもう一度、読もう。「自然神学(4)で思惟する対象は、私たちにとつて直観の対象ではまったくなく、それ自身にとつても感性的直観の対象ではありえない。自然神学では人は熟慮を施して、この対象のあらゆる直観から(この対象の認識はすべて直観でなければならず、思惟であつてはならない。思惟はつねに制限を証明している)からである」時間と空間という制約を消去していったのである。

「自然神学で思惟する対象」とは神である。私たちは神を見ることはできない。視覚的に神の表象を得られないだけでなく、五官を通じたのでは神さまは捉えられない。そもそも私たちの「感性的」(表象を受容する能力)には神は与えられない。したがつて神学の対象は「私たちにとつて直観の対象ではまったくなく」。神は感覚器官を通して私たちの中に表象として入つてくる

と空間の両者を万物の客観的形式にしようというのでなければ、私たちの外的ならびに内的な直観様式の主観的形式とする以外に道はない。この直観様式が感性的と呼ばれるわけは、それが根源的(ursprünglich)ではないからである。すなわちそれによつて直観の客観(Object)が与えらるるような(そして私たちが洞察するかぎりでは原存在者(Umwelt)にのみ属しうるような)直観様式ではなく、この直観様式は客観の現存在に依存しているから、したがつて主観の表象能力が客観により触発されることによつてのみ可能だから、感性的と呼ばれるのである。カントは批判哲学によつて私たちの認識を感性的対象に限定した。かくして人間の認識の限界を定めた訳であるが、この一文にも見られるように限界設定により限界の彼方がシルエツトのごとく浮かびあがつてくるのである。

### 《 註 》

(1)「そもそも「批判」(Kritik)とは「分けること」(Kritereion)である。」  
(2)前回は『純粹理性批判』「感性論」からの引用文で、とくに「主観的」ということに注目した。今日もそれを引き出すことになる。「主観的」とは〈もの〉/ 客観(object)に属さない、コギトする「主観」の側に属するという意味にはかならない。しかしこの場合も「あなた」や「わたし」の個人的見解や感じ方が問題になっていないのである。

(3)「内は北岡による補足」

(4)「神は言われた。光あれ。こうして光があつた。」(創・1:3)。直観することで直観の対象が存在にみたらされるということは、あるいは「創世記」冒頭の神と世界に存在する様々な〈もの〉との関係を思い浮かべれば、いくぶん理解しやすいかもしれない。しかし聖書の記述が文字通り事態に的中しているかどうかは別問題である。逆に言えば、ビッグバンを想定しながら、神の直観(知的直観)の創造性を主張することは何ら矛盾しない。ビッグバンは感性界でのイマー

わけではない。誰かが神さまの顔はかくかくしかじかで、体つきはこうこうであると言え、その人は嘘を言っている、あるいは気がふれているのである。そのどちらかだということは、確かめなくとも分かる。――さらに言われる。神は「それ自身にとつても」、つまり神自身にとつても「感性的直観の対象ではありえない」。だが、「直観」の対象であること全般が否定されているのではない。「感性的」直観の対象ではないと言われているだけである。そもそも感性的とは私たちが有限な存在者の受容性能力である。時間空間が受容性の形式として私たちの心にアプリオリに備わっている。表象を、イマージュを時空形式に服した形でコギトの照射領域に取り込む能力、それが感性である。感性はコギトの主観(私、自我)が有限であること、依存的であることの証しである。私たちの直観は〈もの〉を生み出すのではない。私たちが直観するのは、感性的直観とは関わりなくすでに有るものだけである。そこに見えるベトトルやテューブルの時空的表象を、私たちは感覚ともども受け入れていく(直観している)。しかし私たちが直観するからといって、ベトトルもテューブルも存在にいたるわけではない。存在するようになるわけではない。私たちが見る・見ないにかかわらず、最初から有る。私たちの直観様式は「客観の現存在に依存している」。逆に言えば、後段で言われるように、神の直観(神が直観することは、直観によつて直観の対象が存在にみたらすのである(5))。

直観こそが原存在者の働きであり、思惟は神にふさわしくないといわれている。直観と言つても私たちの感性的直観ではなくて、知的直観である。その内容が異なるものであるかは、私たちにイマジンできない。それは神がいかなる存在者であるかをイマジンできないのとおなじである。思惟というのは、分別や結合といった悟性(Understanding, Verstand)によつて遂行される働きや、推理・推論といった理性によつて遂行される働きをなす私たちの心的能力である。理性的存在者一般の最低層に位置する人間には思惟も備わっているが、神にはそのようなものはない(6)。神は無制約者である。その神が時間と空間との制約

ジュであり、知的直観は叡智界での「原存在者」と派生的・依存的存在者との関係についての命題定立だからである。

(6)人間が純粹理性に「つまり定言命法に、いろいろな理屈をつけて従わないのは、思惟・分別するに際して、常に動物としての個体のエゴを中心としているからである。」

(7)「無批判」とは現象と物自体とを区別せず、「もの一般」について論じようとする姿勢のことである。

(8)九鬼周造はOntologieを「本体論」と訳す。また宮沢賢治も「本体論」という言葉を用いるとき、おそらくはOntologieの訳語として当時浸透していたと考えられる用語を用いたものと思われる。『春と修羅』「序」(筑摩文庫「宮沢賢治全集」1、15頁以下)。

(9)クリスチャン・ヴォルフ(Christian Wolf/1679-1754)は、その著作『自然神学』§75で次のように述べる。「神は、相互に結びついた物質的なもの諸要素を産出すると同時に、空間を作つたのである。」―同§76では「神は、絶えざる変化に服するような物質的なもの諸要素を産出すると同時に、時をも作つたのである。」―このように空間も時間も神により産出された〈もの〉/ 客観的形式とされる。すなわちすべての存在者に含まれているとされる。存在論は存在者一般を論じるので、絶対的にせよ、あるいは特定の所与の条件の下にせよ、すべての存在者に含まれているものを証明せねばならない。『存在論』§8。他方、バウムガルテン(Alexander Gottlieb Baumgarten/1714-1762)は次のように言う。「神において継起はない。それゆえ神には時もない。神は継起の部分構成するような仕方では時のない。神は消滅も神には絶対に不可能であり、神は不変であつて」(habet durationem, maximum, solam realiter infinitam)「それゆえ永遠であり、あらゆる時と共存しつづ常に有る、かつて有つたし、いま有り、将来も有るのである。神は存在する。」(「形而上学」§849)。

(10)論理学の規則。「SはPであると同時に」Non-Pであることはできない。」

(11)「従来の形而上学の重大な誤謬、それは存在概念と存在基準とが感性的諸制約に「感染」して、これに負けてしまふ、という点にあつた――とくに従来の誤謬としてカントの念頭にあるのはクルージュス、またニュートンである――。」(ハインツ・ハイムゼー、近代の形而上学(邦訳、1999年、法政大学出版局、173頁)。

に服しているはずはない。そこで神学者たちあるいは無批判な哲学者たち(7)は、存在者一般を論じる存在論(Ontologie(8))において時間空間を〈もの〉/ 存在の客観的形式としながら、神からはその形式を消去するという矛盾をなしていたのである。だからカントは直ちに次のように言うのである。「しかしながら、予め時間と空間とを〈もの〉/ 自体そのものの形式にしておきながら、しかも、たとえ〈もの〉(die Dinge)を廃棄しても、〈もの〉の現実存在(Existenz)の制約として残るような形式にしておきながら、いったいかなる権利でそのようなことができるのか。(9)――つまり一旦客観的形式とされた時間空間を神から取り除く権利はどこにあるのか。もちろんその権利は誰にも、どこにもない。矛盾律(10)に反するからである。存在論と自然神学とが矛盾するのである。ところで存在論とは「一般形而上学」であつて、カント以前伝統的に「心理学」「宇宙論」「自然神学」という「特殊形而上学」の基礎と考えられてきた。この基礎部門と特殊部門との矛盾をカントは突く。「なぜなら、(そのように〈もの〉/ 客観的形式にしてしまえば) 時間と空間とは一切の現存在(Dasein)の制約でもなければ、神の現存在(Dasein Gottes)の制約でもなければなるまいからである。」―時間と空間とが理性的存在者一般をふくめた「存在者一般」「現存在一般」の制約だとすれば、神も時間空間という「客観的」制約に服することになる。基礎部門である一般形而上学において存在者一般の客観的形式とされた時間空間が特殊形而上学のひとつである自然神学において神学の対象から取り除かれるのである(11)。だからというわけではないが、カントは時間空間の論究を通して両者が「私たちの外的ならびに内的な直観様式の主観的形式」にほかならないことを論証する。これをコペルニクス的転回の最初のステージとみることができる。

感性的とは、すでに有るものを受容的に受け入れる受容性能力の特徴を言い表す。他方、それと対立的に考えられるのが「根源的」である。根源的直観の場合、直観することで対象を存在せしめるのである。「時間

## 立棺

1

わたしの屍体に手を触れるな  
 おまえたちの手は  
 「死」に触れることができない  
 わたしの屍体は  
 群衆のなかにまじえて  
 雨にうたせよ  
 われわれには手がない  
 われわれには死に触れるべき手が  
 わたしは都会の窓を知っている  
 わたしはあの誰もいない窓を知っている  
 どの都市へ行ってみても  
 おまえたちは部屋にいたためしがない  
 結婚も仕事も  
 情熱も眠りも　そして死でさえも  
 おまえたちの部屋から追い出されて  
 おまえたちのように失業者になるのだ  
 われわれには職がない  
 われわれには死に触れるべき職がない  
 わたしは都会の雨を知っている  
 わたしはあの蝙蝠傘の群れを知っている  
 どの都市へ行ってみても  
 おまえたちは屋根の下にいたためしがない

## 価値も信仰も

革命も希望も　また生でさえも  
 おまえたちの屋根の下から追い出されて  
 おまえたちのように失業者になるのだ  
 われわれには職がない  
 われわれには生に触れるべき職がない

(I～IIIのI引用)

これは田村隆一の第一詩集にして日本の戦後詩の幕開けとして名高い詩集「四千の日と夜」所収の名詩の一篇であるが、この「立棺」と呼ばれるものにそもそも「寝棺」や「座棺」のような呼称として現実に対応する柩があるのだろうか。

わたしの屍体を地に寝かすな  
 おまえたちの死は  
 地に休むことができない  
 わたしの屍体は  
 立棺のなかにおさめて  
 直立させよ

地上にはわれわれの墓がない

地上にはわれわれの屍体をいれる墓がない

(同、IIより)

「立棺」という語彙そのものは実は鮎川信夫↓中桐雅夫↓田村隆一という、戦後当時の現状と生きる意味を問う荒地派の中の三人の詩人によって、まず謂わばイメージを越えたイメージとして受け継がれていったものであるらしい。

マリアにイエスが告げた復活のことばに「我に触れるな」(フリメタンゲレ)がある(ヨハネによる福音書20:11～18節)。聖書のなかではすがり付こうとするマグダラのマリアにたいして復活したイエスが、触るなというのだ。田村の「立棺」は、アンチクリストとしての田村隆一らの姿勢をあるいはこの福音書を十分に意識しつつ表しているのかも知れないが、それらはともに、生きることとしての魂の自立を問うているという意味では違うものではない。

戦後の生への心境を遠ざかり、厭世感に満たされて死者へ連なる生者としてさっさと歩み去ってしまおうということは、後腐れもなく潔いことかも知れない、けれど詩として踏み留まること、それもまた残された死に方のはひとつではないかと思う。



## ◆子守唄

富 哲世

鶯色のボールを  
 しゃんしゃんと闇の廊下に投げ入れると  
 あさまだきの子守唄のほうへ  
 畳まれたフランネルの庭へと  
 思い出はまた遠ざかる  
 アモルファスな羽を開いて  
 どんな小さなため息も  
 指輪のように 泉のように  
 かがみ込む背中をあたたかく包むだろう  
 だれかがだれかに話しかける  
 小鳥はことりに  
 沈黙はずけき

うつけた顔が音信をかすかにすると  
 おどすような足音のあと  
 その夜三匹の動物を連れだつたまま  
 子供は戻つてなかつた

## ◆桃を食む

高橋雅城

朝風 十五句  
 空梅雨やかんかんかんと石うがつ  
 正直をほどほどにして熱帯夜  
 熱帯の夜にへそあたりが痒い  
 桃を食んでこんちくしょうだ編集長  
 悪戯はほどほどゴーヤチャンプルー  
 世の中の平和を集め朝風げり  
 家々に幸不幸あり黴薫る  
 世の中の不幸を集む黴の家  
 株式は乱高下して父ちびる  
 スーパーのちらしたたむや母ちぢむ  
 日本経 済 新聞 兄 か える  
 じゃんけんをしてみたいこ茄子胡瓜  
 夜の秋ながながぐーちよきばーその他  
 本年は節目節目の男梅雨  
 日捲に漣たらしめて女梅雨

良信忌 十句  
 男梅雨繁し寺岡良信忌  
 女梅雨雲引き裂いて良信忌  
 男梅雨止まず全共闘きらう  
 良信と云ふ人在りき今年梅雨  
 朝夕は風ぎて寺岡良信忌  
 桜桃忌河童忌寺田良信忌  
 薪割の音の朝風良信忌  
 夏早瀬を渡るなり良信忌  
 良信の墓を訪ふなり長けし夏  
 道をしへ道を教えよ良信忌

## ◆サンゴ礁の波

北岡武司

波のレンズ 珊瑚礁に揺れ 厚く薄く  
 海水の緑濃くなり透きとおる  
 陸地では 甘い風がそよ吹き  
 降りつもった火山灰にヤジリや  
 射抜かれたシャレコウベ  
 震洋の名残も覆われ  
 灰が風に運ばれ降りつみ 層がいくつも隠れ  
 人間に起こったことの思い出が南の島につ  
 み重なる

今日もあすもあざつても  
 出来事はしでかされ  
 歴史が時間のなかに降りつみ 地層をなす  
 Heute, morgen und auch übermorgen  
 schichten sich Geschichten in der Zeit  
 Und machen verschiedene Schichten aus.  
 遠い昔の遠い国の出来事が  
 こんな島にも物見台をもとめた

珊瑚礁の島に火山灰が降り  
 ひとがしでかし ひとにふりかかるマグマ  
 その  
 噴出  
 まだこぬときにも歴史はしでかされ  
 運命が降りつもり あらたな地層を作り  
 すすむ  
 しでかされたこと しでかされていること  
 しでかされるだろうことの全体  
 はじまりと終わり  
 Was geschah, was geschieht  
 Und was geschehen wird,  
 Hat auch dessen Ganze einen Anfang  
 und ein Ende.

はじめと終わり ー  
 ときのなかに思い浮かべれば  
 エデンの園と神の国か 神々の国と自由の  
 完成か  
 両端のあいだで歴史はすすむ  
 マグマを噴出しながらすすむ  
 楽園は地上になく ときのなかには  
 神の国も自由の完成もない

ぼくらの思い浮かべはときのなかにしかな  
 いのに  
 山もない島に火山灰降りつみ  
 太古から 今も これからも 歴史が降り  
 かかる  
 遙か水平線のかなたに狼煙が予兆となつて  
 あがり  
 マグマの吹き出しそうな気配が風にのる  
 遠い空の下 いまにも噴火がはじまりそうな  
 歴史の予感に戦く  
 波頭は環礁に砕け 白く速く蛇のように  
 這う

※太平洋戦争末期、海軍で用いられた特攻兵器。ヘニヤ板製モーターボートの艇首部に爆薬を内蔵し、搭乗員が乗り込み目標艦艇に体当たり攻撃を敢行する。起用されたのは学徒兵、幼い子科練出身者たちである。

うた  
神戸詞あしび

104-2016.07.24 大橋愛由等



保久良神社の権根津彦命

年に一度  
だけだから、  
変化を際立  
って認識し  
てしまう。  
七月下旬  
の梅雨あけ  
から、「ロル  
カ詩祭」のあ  
る八月中旬  
まで、拙宅か

配者<sup>2</sup>として統治していたところ、神武天皇が九州から攻  
め上ってきたとき、明石海峡で合流して、大和侵攻のたすけ  
をしたというのである。つまり後の大和政権にとって協力  
者の位置を確保することによって滅ぼされずに、領地を安  
堵されたわけである。

この〈権根津彦命〉の彫像がなぜ平成の今となって造られ  
たのかその経緯は知らない。わたしにとつて神話時代の神  
が忽然と現れたというイメージでしかない。現代に古代の  
神が必要だったのだろうか。「国つ神」なので直接には天皇  
家と直結はしない。

〈権根津彦命〉が青い亀に乗って上陸した場所が「青亀<sup>あおかめ</sup>」  
と呼ばれ、それが現在の「青木<sup>あおぎ</sup>」につながっていく。その「青  
亀<sup>あおかめ</sup>」から田邊地区を経て、わたしの居住する「北畑<sup>きたはた</sup>」  
から保久良山に神が歩いたのである。面白いのは、拙宅近く  
に海から続く小さな南北の道があつて、JRの線路に遮ら  
れることなく山につながっている。これはいわゆる「神道<sup>かみち</sup>」

と呼ばれるものであろう。奄  
美群島のシマ(集落)にはか  
ならずこうした「神道<sup>かみち</sup>」があ  
り、ノロクメといった祭祀者  
が、拜ん所<sup>うがしよ</sup>、あるいはテラと

突如あらわれた  
神話時代の神は

巨石には線刻されたものもあり、神々の依り代であつたことがうかがいしれる。つまり巨  
石の庭は、神遊びの神聖な場所だったのであろう。しかし残念  
ながら神社信仰以前の神人による神遊びは絶えていて、神  
社周辺の巨石たちだけが、この地の神祇信仰の深さを物語  
つてくれる。

その保久良神社の鳥居の前に忽然と神さまが現れた。〈権  
根津彦命〉と書いて「しいねつひこのみこと」と呼ぶ。わた  
しが住む神戸市東灘区の菟原地区の統治を任された〈権根  
津彦命〉が青い亀に乗って「海から昇る日輪太陽が遥拝で  
きる場所」(案内板から)を海上から探し求めたところ、この  
「ほくら山」にたどり着いたというのである。

以後、〈権根津彦命〉は菟原地区を「国つ神」に在郷の支

よばれる聖地に直結する通路がある構造と同じであらう。  
いわば〈権根津彦命〉が「青亀<sup>あおかめ</sup>」に上陸してほくら  
山にむかうその筋道が拙宅の間近にあるというわけであ  
る。

しかしこの「神道<sup>かみち</sup>」はひとの命も吸い取ってしまう。一九  
九五年一月一七日の阪神・淡路大震災が発生した午前五時  
四六分の時刻にも保久良山への早朝登山者がいて(この時期  
のこの時間はまだ夜のさなかである)、神道ぞいの住宅ががけ崩  
れをおこし、その下敷きになった一人の犠牲者がなかなか  
発見されなかったのである。また保久良神社境内にあつた

早朝登山者向けの休憩所も震災の揺れで倒壊。そこにいた  
登山者も犠牲になつていく。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.115

神戸

2016年07月24日 通巻115号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価 600 円(税込)